自由律俳句協会ニュースレター20号　2022年10月20日発行

投句欄　自由律の泉 ⑯

1 振り向けば折れて九十九(つづら)を驀地(まっしぐら)　檜 幽可

2 西日に目覚めてオシロイバナは艶姿　白松 いちろう

3 もどり梅雨ささない傘持つ行き帰り　和嵜 はると

4 町を背にゆるやかに山に登る　大岳 次郎

5 成分なら汗君も俺も同じ　木村 浩

6 何事もないさびしさで今日を終るあくび　久光 良一

7 湧き起こる向日葵の波音　アカホリフキ

8 死体にも忖度して心肺停止　行方ほいさっさ

9 ちいさい団扇のまっさら少女　野谷 真治

10 停年習性となった躰で玄関に佇んでいる　小山 榮康

11 歳をとる　色がおちてゆく　無 一

12 ナビを消し気ままに最長ルート　原 さつき

13 夜が二つに割れ　遠い人になって行く　金澤 ひろあき

14 世の中はＧＩＧＡたっぷりで戯画たっぷり　童家(わらしや) まさゆき

15 忙しない熊蝉、寝ころんであんぐりとひと息　植田 博

16 蝉声上げ陽に抗う真っぴる　佐瀬 風井梧

17 一日を無駄使いしてしまった熱帯夜　ちば つゆこ

18 列車が行く故郷を投げ捨てていく　河内 秀斗

19 草の径　答えのないもの探している　黒瀬 文子

20 メダカひとりで逝った暑い午後　富永 鳩山

21 破滅の武器はより恐ろしく泣きそうになる　富永 順子

22 おとこ目線を気付かれた恥ずかしさに沈んだ　部屋 慈音

23 なつぞら蜘蛛の巣からまる少年　大迫 秀雪

24 火曜日の泣き顔に化粧をする　篠原 紀子

25 なんもかんも値上がりし夢道の句をよんでいる　佐川 智英実

26 まだまだ蕾は満開を夢見させる　荻島 架人

27 3（スリー）ポイント連続決めて目が覚めて　山本 説子

28 ブリキの十字架空に浮かんだ相対性理論　井尾 良子

29 炎天下アガパンサスやすらかに散り　平林 吉明

30 テレビに軽く頷く隣も半袖ハーパン冷やし中華　さいとう こう

31 地雷が埋まる八月のひまわり畑　平岡 久美子

32 チャリ停めてムクゲの下に寝転がる　新山 賢治

33 自然のゆらぎの中を泳ぐ　竹内 朋子

34 風あたり仰向けの蝉　田中 直心

35 みな寝静まり広縁の街明かりたよりに飲る　湯原 柳泉洞

36 じゃんけんで勝ったところで運が尽き　伊藤 哲英

37 草取りの雑草となるあなただ　室伏 満晴

●泉 ⑮より　一句鑑賞

棺に手を振り母を火にあずける　部屋 慈音

▼託された「火の神様」、きっと母上様を天国へと導かれたことでしょう。ご冥福をお祈り申し上げます。　**（檜 幽可）**

▼三年前句のようにして私も妻を見送りました。心が揺さ振られる深い思いを刻み込んで来る句でした。　**（小山 榮康）**

▼「火にあずける」という表現が胸に迫ります。できることはしつくした作者の真面目さと、根底に流れる清らかさを感じました。　**（佐川 智英実）**

朝刊の音何処までも五月晴　野谷 真治

▼早朝、朝刊の届く音に着眼されたセンスにアッと驚きました。梅雨の合間の晴れ間からすっきりとした青空が広がる様子が見えてきました。清々しい朝ですね。　**（白松 いちろう）**

▼朝刊の音の正体は何か。ポストにカタリと挟み込む音か、それともタタタと響く二輪の音か。ところで五月晴にもまた二つの意味があるらしい。梅雨の合間のしめやかなそれ、カラリとしたそれのいずれにも、ここちよい音が想像できる。　**（湯原 柳泉洞）**

戦争とたんに人殺しが勇者になる　富永 順子

▼ロシアのウクライナ侵攻!!　人殺しがまかり通る戦争ほど残酷なものはありません。日常生活を壊された、どちらの国にも得にならない戦争は一日も早く終息して欲しい…。今、私たちの出来ることは終息を祈る事だけです。　**（和嵜 はると）**

せんべい頬張り昔のことみんな忘れた　平岡 久美子

▼なぜか、「ケセラセラ」の歌が聞こえてきます。せんべいという硬い？ものを口にすると、砕ききるうちに、スッキリします。昔のことは昔のことということで、水に流しましょう。いや、お茶で流してしまいましょう。

（大岳 次郎）

▼諸々の断捨離の勇気を支えるおせんべいは、作者の強力な武器だ。ユーモラスではあるが、往々にして生の人生にあることである。すっぱりとさよならが小気味いい。

（部屋 慈音）

▼些細な事に振り回される毎日ですが、後々振り返ってみれば、それ程大した事でもなく、すべてが昔話や笑い話になってゆきます。あっけらかんと何でもない事を言ってますが、人生を全うする極意にも思えます。

（平林 吉明）

深夜の月の光にそっと窓をあける　山本 説子

▼暑い夏の夜はエアコンをつけて寝ますが、明け方になると、外気も涼しくなるので、窓やベランダへの出口を開けて網戸にして寝ることも多く、そんな時に月が出ていると、思わぬ月見ができて心がやすらぎます。

（久光 良一）

宛名に氷見市と書いて冬　篠原 紀子

▼宛名書きをしている時の作者をとりまく空気感が雰囲気があるなと感じました。何かの節目のようなものを感じました。

（アカホリ フキ）

感動を与えると言った選手が病んでいる　伊藤 哲英

▼個人的には最後の「る」を「た」にしてほしかったという気がしますが…。事実としてはおそらく「言った」後に「病んで」休業宣言かなんかしたのかと…。よく知りませんが、最近有名人の休業が相次いでるようですね。

（行方ほいさっさ）

独り言に　ひとりごと　檜 幽可

▼私にも当てはまります。

（無　一）

母の文房具　使い切るまで生きる　新山 賢治

▼お母様への深い感謝と愛情と覚悟があふれる句。使いきるのはできるだけ、遅くなってほしい。大切な人のものはいつも身近に置いておきたいですから。

（原 さつき）

さびしい風鈴が時々風を思い出す　久光 良一

▼何かを求めて生きている。私達も風鈴も。満たされないさびしい時間が続く。限りなく長い沈黙の時間。その沈黙が一瞬破られる。風鈴の歓喜の声があがる。やがてまた沈黙に帰って行くのだが。

（金澤 ひろあき）

▼なかなか風が吹かずに寂しがっていた風鈴が、時々音を鳴らしています。過去の楽しかったことが、気持ちを穏やかな楽しみに包んでくれています。そんな気持ちがします。楽しい思い出、たくさん鳴るといいですね。

（田中 直心）

あちこちに歪み地球も老いてきたか　黒瀬 文子

▼まさに、そう。環境破壊で高温やら、豪雨、台風。クーデターに、侵略、戦争、ウイルス。地球はどうなるのだろう。「地球も老いてきたか」に実感がこもる。

（ちば つゆこ）

▼線状降水帯なんて若い頃はなかった。熱中症もしかり。地球温暖化で絶滅する種もあるという。たしかに地球は老いてきた。だけど人類が地球にいなかったら、地球は今も若いんだ。そのことは忘れないで。

（伊藤 哲英）

歯車の狂った親分の一大事　　白松　いちろう

▼国のリーダーの資質が問われます。何だか狂った親分が多くて本当に一大事です。アイロニーの利いた句だと思います。　（**黒瀬　文子**）

氷見線走れ海側に傾げ　　篠原　紀子

▼氷見線に乗ったことはありませんが、一読して爽やかな海風に吹かれるような心地よさを感じました。「傾げ」の一語がそう思わせるのかも知れません。　（**大迫　秀雪**）

直角な僕たちは座高測定してました　　佐川　智英実

▼今は廃止になった座高測定。背筋を伸ばし顎を引いて口を結んで測定を受ける少年たち。「直角な僕たち」に惹かれました。まだあどけなく融通のきかない、でもまっすぐだった頃を思い出します。　（**篠原　紀子**）

青空に桜満開　　大岳　次郎

▼良い句ですね。一瞬にしてきれいな景色が見えてまいりました。気持の良い青空に美しく優しい桜の花、想像しただけでもなんだか穏やかな気持ちになり、ほっこりしました。　（**山本　説子**）

何か伝えたくて回っている水車　　富永　鳩山

▼人は言葉という手段で人に言いたいことを伝えることが出来る。しかし今はそれもかなわない。まして水車は言葉を持たない。今の世が悲しくてももどかしくても、伝えられない。誰か早く気がついて。今日もコットンコットン回っている。　（**井尾　良子**）

▼孤高である。静寂の中で書に向かい、あるいは山頭火句集をめくる鳩山氏の佇まいが広がる。水車は一人で動いているのではない。流れ来る水流に押されて回り新たなエネルギーを創り出す。私も水滴となり水車を回したい。　（**新山　賢治**）

▼親の愛のような静かで豊かな愛を感じます。淡々と回る水車の声を聴きとりたい！　沢山の思いが膨らんで参ります。　（**竹内　朋子**）

箸ですくうおかゆに光る朝　　荻島　架人

▼おかゆ「が」ではなく、おかゆ「に」とされたところが、この句に奥行きと深みを持たせている気がします。まるで箸で朝日まで掬ってしまったようで、爽やかな朝の光景が目に浮かびます。（**室伏　満晴**）

●係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832　八王子市散田町2-58-4
平岡久美子
メール　kumiko801@wh-wing.net

〈締め切り〉　2022年11月30日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください（投句用紙にチェック欄があります）。